

# ★輝く！地域包括ケア

すべての人々のためにつながる看護職

## 第3回 小豆圏域（香川県）

およそ3万人が暮らし、小豆島町と土庄町の2町からなる香川県小豆郡。2017年度、小豆圏域として県看護協会と保健所、町、病院などの看護職が、子育て世代への包括的な支援に向けた日本看護協会の連携強化モデル事業に取り組んだ。事業が終わった後も取り組みを発展させ、住民への切れ目のない支援を続けている。

### 課題を共有し地域の妊産婦を支える

小豆島中央病院は、小豆島や豊島などからなる圏域内で唯一、産科・小児科を持つ総合病院だ。2016年、同院を中心に地域包括ケア連絡会が発足。以来、あらゆる世代に一体的・総合的なサービスを提供することを目指している。

近年、産後うつなど周産期のメンタルヘルス事例が増えており、同院では、母子の退院後も町の保健師に家庭訪問による継続看護を依頼するなどしてきた。主任助産師の山本ひかるさんは、自身の看護研究を通して出産・退院直後の母親の不安が強いことを把握し、産後2週間健診を開始。エジンバラ産後うつ病質問票の結果から、対象者にメンタルサポートを行うなどの対策も取ったが「移住者も多く、帰郷出産が3割を占めるという島の事情もあり、精神的な問題を抱え、かかりつけ医を持たない産婦をどう支えるかは大きな課題でした」と明かす。

土庄町健康増進課で副保健師長を務める井上紀子さんと小豆島町健康づくり福祉課の坂東奈

保子さんら、病院から連絡を受けて家庭訪問をする保健師側も、担当者だけでの対応に限界を感じていた。「精神科医との連携を含め、地域全体で対象者をサポートする体制づくりが急務でした」と振り返る。

こうした中、両町を管轄する香川県小豆保健所保健福祉課の保健師、松原佳代子課長も、地域をどうサポートしていくか模索していた。17年、県看護協会の田中邦代保健師職能委員長からモデル事業の話があることを聞き、渡りに船と参加を決めた。

松原課長は同課の保健師、谷本愛さんや片岡未帆さんと地域の課題を整理。田中委員長も松原課長と共に小豆島中央病院を訪ね、モデル事業への協力を依頼した。同院の吉元和子看護部長は、院長や小児科・産科医の理解も得て院内の運営会議で参加に向けた調整を進めた。こうして地域の看護職がつながり、産後ケアの充実に向けた輪が回り始めた。

### 安心して子育てができる島に

モデル事業では、さまざまな場にいる看護職が顔を合わせ、周産期の課題などについて話し合った。その過程で、両町や小豆島中央病院、保健所などが、妊娠期から育児期に行う各種相談事業や定期健診、関係者の連絡会や会議をまとめ、一覧で示した「小豆管内母子保健連携体制図」を作成し、共有した。

継続看護連絡票の使い方にも変化があった。町と病院が互いに必要な情報を確認し合ったことで、情報の精度が上ががり、具体的な依頼内容や対応時期の指定なども記載する伝達ツールとして活用するようになった。産後だけでなく、妊娠中から気になる対象者がいれば、早めに連



18年2月、妊娠期からの切れ目のない支援と多職種連携に向けた研修会を行った

絡票で情報を交換するようにもなった。

メンタルヘルスへの対応では、課題になっていた精神科医との連携に向けて、圏域内で唯一、精神科の診療を行っている小豆島病院にも協力を仰ぎ、医師を会議に招いて看護職と医師、異なる医療機関の医師同士の顔つきを行った。その後、主治医がいないケースでは、保健所が妊産婦や町、病院からのワンストップ相談窓口となり、精神科医のコンサルテーションを受けながら支援していく仕組みができた。

モデル事業の後、実際に保健所を通じてコンサルテーションを受けた土庄町の井上さんは「家庭訪問の後に、今後の対応や方向性を確認することができて良かった」と語る。小豆島中央病院の吉元看護部長が「複雑な背景を抱えている妊産婦の場合は、院内のファミリーサポートチームや虐待防止委員会でも検討し、フィードバックできるようになりました」と話す通り、地域全体で支援していく体制も整ってきた。

小豆保健所の松原課長は「社会資源の少ない地域では、人が財産です。今後は人材育成にも力を入れ、住民に還元できれば」と期待する。「安心して子育てができる島にしたい」というのが、圏域の関係者共通の願いだ。